



新CL寓話—XⅢ

2019

David K. Reynolds, Ph.D.

第1部

13.Gratitude

変わり者の兎

森の動物たちが興奮してガヤガヤとざわめいていました。衝撃的なニュースはジョニー・ラビットの大きな変化でした。森の中では静かで、普通の市民と変わりありませんでした。ところが今、ジョニーはいつも「ありがとうございます」と言って走り回って、地面にお辞儀して、会う人ごとに丁寧に長い耳をちょっと下げました。

2羽のコマドリが枝の上に座っておしゃべりをしています。

「ジョニー・ラビットが、食べる前にニンジンにお礼をしているのを見たわ」。

「私はジョニーが昨日、暖めてくれた太陽にお礼をするのを聞いたわ」。

その近くの枝の上では、ドングリをかじりながら、数匹のリスがコマドリたちの話を聞いていました。

「僕が「ハロー」と言ったら、ジョニーが「ありがとう、ハロー」といったんだ。なんておかしな言い方をするんだろう」とリスのピーターが話に加わりました。

「それとジョニーが住んでいる古い枯れた丸太にお礼をしているのを見たよ」。皆が枯れた丸太は何も聞けないことを知っています！「なんてばかな兎でしょう！」ともう1匹のリスが言い足しました。ジョニー・ラビットにどんなことがあったのでしょうか？森中の動物全員が混乱しました。あいかわらずジョニーは、あちこちに飛び回って、野生のキャベツとクローバーをつまみぐいして、微笑み、見るものすべてに、みんなに感謝して、用事を続けました。森の皆が話していたジョニーの噂が彼を悩ませたように見えませんでした。

「うさぎはなんて非現実的で、非実際のなんだろう」何人かがいら立って言いました。

「なぜそんなにありがたく思わなくちゃいけないのかい？すごく驚くようなことあったんだろうか？」と他の人たちに聞きました。

「おかしっ！」「どうして古い丸太に感謝するのか？」

「自分の毛の中にいた蚤に感謝するとしたら驚きだ」と耳の後ろをかきながらウルフ氏が笑って言いました。

ジョニー・ラビットは微笑んでお辞儀をして、周りの世界に「ありがとう」をし続けました。

そのうち、動物の仲間たちはジョニーの話に飽きてきました。仲間たちのほとんどは、ジョニーが、岩から成長した木とか、わなで1本の脚を失くして、3本の脚を引きずって歩く熊ほどおかしなことではなかったと考えました。それでも何人かの仲間はジョニーがなぜいつも微笑んでいるように見えるのか不思議に思いました。

ジョニー・ラビットは人生についてある秘密を知っていました。幸福を増やす方法です。ものごとすべてに感謝する大切さを知っていました。それで自分の食物であるニンジンに、太陽の暖かさに、挨拶してくれる仲間たちに感謝していました。ジョニーはとても感謝していたので、たくさん微笑んでいたのです。世界は完ぺきではありませんが、感謝に値することがらに満ちています。

自分が不幸だと思うのは、本当に受け取っている以上に自分はまだもっと受け取れて当然と信じることから来ます。世界からいただくどんなに小さな贈り物でもきちんと感謝するのは、不幸になりにくいです。動物の仲間はジョニー・ラビットがおかしいと思いましたが、ジョニーは、みなに関心に感謝するだけで、微笑んで、世界に感謝し続けました。このように信心深い人をあなたは知っていますか？

(アメリカ・オレゴン州CLセンター所長)